様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21　年　6　月　1　日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006 年度～2008 年度
課題番号：１８５３０５７６
研究課題名（和文）　ポジティブ感情の機能に関する多角的検討

研究課題名（英文）　Multifaceted study on function of positive emotions

研究代表者　鈴木　直人
同志社大学　文学部　教授
研究者番号　30094428

研究成果の概要：
ポジティブ・サイコロジーの出現以来、感情心理学の分野においてもポジティブ感情の機能や存在意義に関する様々な説が提示されるようになってきた。例えば、まず第１に、ポジティブ感情は、ネガティブな感情によって亢進された精神生理学的反応を素早く元に戻す『元通り効果（undoing effect)』を持つという機能的意義も提唱された。さらには、ポジティブ感情は試行の柔軟性をもたらす、社交性を高めたり、健康にもプラスに働くなど、問題への対処というよりは、時定数の長い広範囲の有効な資源の動員を促すという Fredrickson らの拡大―形成理論が提唱されるにいたった。しかしながら、一部の研究を除きこれらの存在意義や機能的意義に関して十分な十書的研究は行われておらず、ややもするとアイディアだけが先行している感がある。当初、申請では、主に元通り効果について検討する予定をしていたが、これまでの申請者の研究でも元通り効果と思われる現象が見られたことと、ポジティブ感情が思考などの柔軟性をもたらすという指摘については実証的なデータがあまり見られないことなどを鑑み、補助金を受けた研究では主にポジティブ感情が真に試行の柔軟性や、対処事態での行動の切り替えの柔軟性に効果を持つのかについて検討した。
本研究報告では２つの実験についてその結果を報告している。
まず、第１の実験パラダイムとしてポジティブ感情状態の実験参加者と、低い実験参加者を用いて問題解決実験を行わせ、その課題の解決方法が途中で急変し、それに対処しなければならない事態を作って研究した。その結果、ポジティブ感情の高低は、事態急変前後の課題遂行成績には影響を及ぼさなかったが､ポジティブ感情が心身への負荷を和らげる効果が示された。
第２の実験パラダイムとして、実験参加者にポジティブ感情、ネガティブ感情、ニュートラル感情を歓喜し、その前後で、物事を考えなければ、あるいは発想の転換をしなければ解決できないを拡散課題、物事を考えるというよりは課題に集中しなければならない集中課題を負荷し、その成績を比較した。その結果、ポジティブ感情の喚起は｣、拡散課題の成績を上昇させたのに対し、ネガティブ感情、ニュートラル観桜はそのよう奈効果をもたらさなかった。また一方、ネガティブ感情の喚起は集中課題の成績を上昇させたが、ポジティブ感情の喚起では集中課題に対してはなんら変化をもたらさなかった。
以上の結果からポジティブ感情の喚起、もしくはおポジティブ感情状態にあるものは、問題解決場面などで､柔軟な考えかたができ､対処ができる可能性が示唆された｡先述したように、ポジティブ感情の機能や存在意義に関して実証的データは少なく、本研究の成果、特に題２番目の研究は Isen や Fredrickson らの主張を強く支持するデータであり､ポジティブ感情研究、あるいはポジティブ心理学に貢献するものである。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	2,500,000	0	2,500,000
2007 年度	500,000	150,000	650,000
2008 年度	500,000	150,000	650,000
総　計	3,500,000	300,000	3,800,000

研究分野：　社会科学
科研費の分科・細目：心理学・実験心理学
キーワード：
　ポジティブ感情、思考の柔軟性、

１．研究開始当初の背景

これまでの感情研究は、ネガティブな感情に関する研究が注目を集め、ポジティブな感情に関する研究は等閑視されてきた。ネガティブな感情は、闘争本能のための感情として「怒り」が存在するというように進化論的にも説明しやすく、また何よりも、ネガティブな感情により喚起された生理的覚醒が心身症をもたらすなど、身体に悪影響を与えることが多くの知見によって明らかにされてきたためである（例えばMayne,1999)。これに対し、ポジティブ感情の存在理由は進化論的にはうまく説明できず、また喜びなどのポジティブ感情が身体にいかなる影響を与えるか不明である。しかしながら、2000年頃から、ポジティブな感情は思考-行動レパートリーを広げ、目新しい方針の思考や行動を導きくこと、さらにはポジティブ感情を経験することが、様々なコーピングを可能にし、well-beingや健康の増加をもたらす可能性がある（Fredrickson の拡大－構築理論、1998,2001）といった、ポジティブ感情の機能を指摘する研究が散見され始め、最近急速にその研究数が増加するに至った。またネガティブ感情により亢進した生理的覚醒がポジティブ感情によって素早く元に戻る“元通り効果”（Fredrickson & Levenson, 1998; Fredrickson et al., 2000)も報告され、ポジティブ感情の存在意義が示唆されるようになった。

本邦においてもここ数年来、ポジティブ感情に関する関心が高まり始めたが、ポジティブ感情の機能についてはまだまだ実証的な研究は少く、理論だけが先行しているのが現状である。

２．研究の目的

2000年以降の心理学の分野での一つの潮流は、人間のポジティブな側面に着目し、それを引き出し、伸ばすことで健康増進やwell-beingの向上をもたらそうとするポジティブ・サイコロジーの出現である。この流れを受け、喜びなどのポジティブ感情に対する関心の高まりが見られる。しかしながらこれまで、ポジティブ感情の存在意義に対する答えはあいまいで、納得できる回答は与えられてこなかった。ところが最近、ポジティブ感情は、創造的な思考活動を促進(Isen, 1998)させたり、ポジティブ感情を持つことで社交的になり、対人関係を促進させたり(Lucas & Baird, 2004)、さらにはAIDS患者の死亡率を低下させる（Moskowitz, 2003）などの効果を持つことが指摘されるようになった。しかしながらこれまでのポジティブ感情に関する研究は、最近の一部の研究(ex. Fredrickson & Levenson, 1998; Fredrickson et al., 2000など）を除き、実証的な研究はほとんどなされておらず、経験則に従った主張が多い。つまりポジティブな感情が生体にとって、どのような意義を持つのか、ポジティブ感情は生体にどのような変化がもたらすのかなど実証的な研究はあまりなされておらず、イメージのみが先行しているのが現状である。そのため、人間行動のポジティブな面に注目した昨今のポジティブ・サイコロジーは、ややもすれば安易な楽観主義を助長し、一種の宗教のように捉えられ、非常に歪んだ形で喧伝されつつある。そこで、本研究は、ポジティブ感情が、認知的な思考能力を広げ、思考の柔軟性をもたらすのかなど、ポジティブ感情の機能を感情面、生理面、認知面から多角的に検討することでポジティブ感情の機能を明確にすることを第一目的として行った。

【１．ポジティブ感情傾向が対処行動に及ぼす影響の検討】

Fredrickson（1998）は、ポジティプ感情が認知の柔軟性を高め、思考一行勤レバ叫トリーを広げるという拡張－形成理論を提唱した。問題解決場面においては、こうしたレパートリーの広がりもさることながら、それぞれの状況に応じて適切な対処方略を選択することがより重要であると考えられる。これまでコーピング場面におけるレパートリーの数そのものとポジティブ感情との関連は報告されているが、ポジティプ感情が実際の対処行動に与える影響についてはあまり知られていない。そこで本研究では、状況の変化を伴う問題解決場面において、ポジティプ感情が対処行動の柔軟な変更を促進するか否かを主観的、生理的、行動的側面から検討した。

【２．ポジティブ感情が思考の柔軟性に及ぼす影響の検討】

ポジティブ感情の重要な機能の一つとして,私たちの注意や認知,行動の範囲を広げるという「拡張(broaden)」効果が検討されている。しかしながら私たちが生活する中で直面する様々な問題を,自分なりの考えを生かして解決させていく行動的側面の課題解決にポジティブ感情の持つ働きを検討した研究は極めて少ない。そこで,本実験では,ポジティブ感情が真に思考・認知面における広がりの機能を持つかを、「Arizona 大学創造

性研究センター」において，拡散思考テストや創造性研究に使用されている数学的洞察・言語的洞察・図形洞察の 15 問題を用いて行動的な側面への影響を検討した。また加えて，「右脳ドリル 120 問」から問題も選択した(児玉,2005)。なお、本実験では、ポジティブ感情、ネガティブ感情の喚起の課題への影響を検討するため、拡散思考課題だけではなく、集中思考課題として CRT(Continuous Performance Task)をも用い,両感情が思考の柔軟性や注意の集中に及ぼす影響を検討することを目的とした。

３．研究の方法

【１．ポジティブ感情傾向が対処行動に及ぼす影響の検討】

実験に参加した大学生の安静時の一般感情尺度の肯定的感情（PA）得点に基づき、実験参加者を PA 高群、PA 中群、PA 低群に群分けし、Wisconsin Card Test を参考に作成した図形分類課題を負荷した。この課題は２つの図形がある基準（形、色、模様、枠の太さのいずれか）に基づいて同じであれば「○」、異なるときは「×」をクリックして回答するというもので、基準は実験参加者が試行錯誤を繰り返す中で見つけ出すという課題である。回答の正誤は音とモニタ上部に呈示したバーの伸縮によって 1 間ごとにフフィードバックされた。60 問からなるセッションを 3 回実施し、セッション 2 とセッション 3 では予告なしに 21 間目から基準が変更された。

実験中の各時点における参加者の主観的状態を調べると同時に、収縮期血圧（SBP）、拡張期血圧（DBP）、心拍率（HR）を測定した。

実験参加者に血圧測定用装置を装着し安静時の生理反応を測定した。一般感情尺度への回答を求めた後、課題の説明を行い、セッションを 3 回実施することを告げた。セッションが修了するたびに一般感情尺度に回答を求め、3 セッションが終アした時点で実験を終了した。なお、第 1 実験では、すべての参加者がセッション中のある決まった時点で基準変更を経験したのに対し、第 2 実験では、各参加者の基準理解に合わせて基準が変更された。

【２．ポジティブ感情傾向が思考の柔軟性に及ぼす影響の検討】

実験参加者を拡散課題と集中課題題条件に分け，それぞれ映像刺激によってポジティブ感情喚起群（以下ポジティブ感情群），ネガティブ感情喚起群（ネガティブ感情群），ニュートラル感情喚起群（ニュートラル感情群）の 3 つの群に分けた。

拡散課題は Arizona 大学の創造性研究センターで，創造性研究のために用いている拡散課題(Diffusion Task)を使用した。この拡散課題は，数学的洞察・言語的洞察・図形洞察問題の３つの部門から構成されており，それぞれ 5 問ずつ合計 15 問を制限時間 10 分間で解くように求めた。なお，Isaak & Just(1995)の拡散課題の中から選らんだ 30 問を 15 問ずつ分け，カウンターバランスをとり感情喚起前（Pre 課題）と感情喚起後（Post 課題）に呈示した。集中課題としては,視覚弁別と聴覚弁別(80dB、1000Hz の高音と 500Hz の低音)を用いた二重課題を用いた。視覚弁別課題は,CPT(Continuous Performance Task)を使用した。試行は 1 ブロックあたり 120 試行あり，3 ブロックを Pre 課題と Post 課題のそれぞれに行った。本実験では 3 ブロックの平均正反応数を用いた。また，Pre 課題と Post 課題の課題内容は同様であった。

実験は個別法で行った。実験参加者に快・不快 10cm スケールと一般感情尺度および GACL に回答を求めた後，拡散課題の Pre 課題に回答を求めた。次に，ポジティブ感情・ネガティブ感情・ニュートラル感情喚起のための３つ刺激映像のうち 1 セットをランダムで，3 分間みせた。続いて，拡散課題の Post 課題に回答を求め，快・不快スケールと一般感情尺度と GACL の感情評定への回答を求め，実験を終了した。集中課題についても同様の手続きで行った。

４．研究成果

【１．ポジティブ感情傾向が対処行動に及ぼす影響の検討】

図形分類課題を用いて、ポジティブ感情が問題解決場面における対処行動の柔軟性にどのような影響を及ぼすかを検討した。

第 1 実験では、すべての参加者がセッション中のある決まった時点で基準変更を経験したのに対し、第 2 実験では、各参加者の基準理解に合わせて基準が変更された。２つの実験の結果、いずれも課題の成績そのものにはポジティブ感情の影響は認められなかったが、ポジティブ感情が高い群ほど回答時間が短かく、ポジティブ感情は問題解決場面において判断をすばやくする効果をもつと考えられた。また、安静時に高いポジティブ感情を持つ実験参加者は、課題遂行中のポジティブ感情とリラックス感が高かった。生理的側面に関しては、ポジティブ感情の高い群ほど、課題遂行中の生理的覚醒が低く、ポジティブ感情がストレスに対する心臓血管系反応の亢進を抑える可能性が示唆された。

このように、ポジティブ感情が問題解決時の心身の負荷を和らげることが示された一方、課題の成績には明白な影響が認められなかった。ポジティブ感情は、いくつもの解決策を生み出すような拡散性の思考を要する課題では遂行を向上させるが、限られた情報をもとに正しい分類基準を見つけ出すという本研究の課題のような収束性の思考を要する課題では、遂行に影響をもたらさない可能性を示すものと考えられる。

【２．ポジティブ感情傾向が思考の柔軟性に及ぼす影響の検討】

ポジティブ感情の拡張－構築理論の仮説に基づき，拡散課題および集中課題を用いて，ポジティブ感情が課題遂行に及ぼす影響について 2 つの実験を行い検討した。実験１では，集中課題遂行に対する感情の影響を検討

した。その結果、ネガティブ感情喚起群は思考を狭める「収縮効果」を示し、課題成績の向上を示したが，ポジティブ感情喚起群は，課題成績に影響を及ぼさなかった。実験２では、拡散課題遂行に対する感情喚起の影響を扱った。その結果、ポジティブ感情喚起群では拡散課題の成績が向上し，ポジティブ感情が思考を広げる「拡張効果」が示された。さらに，実験３では，ポジティブ感情の強さの違いが拡散課題成績に及ぼす影響について検討した結果，ポジティブ感情は拡散課題遂行に影響を及ぼすが、その強さの程度の違いは，課題成績に影響を与えずなかった。
以上の結果は，ポジティブ感情は多様な問題解決方策を必要とする拡散性思考課題ではその成績を向上させ，一方、ネガティブ感情は弁別課題のような収縮性思考を要する課題に優位である可能性が示唆するものである。以上のように，本研究は、ポジティブ感情の持つ拡張効果、またネガティブ感情の持つ収縮効果を実証的に示したものである。従来のポジティブ感情に関する拡張－構築理論は、理論が先行し、実証的データが少ないところに重大な欠点を持っていた。本研究は，この分野に実証的なデータを提供したという意味においてポジティブ感情研究、あるいはポジティブ心理学に貢献するものである。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　19　件）

1)手塚洋介・城　佳子・長野祐一郎・鈴木直人・児玉昌久　ネガティブ感情体験および心像血管反応の喚起に及ぼす認知的評価の影響　同志社心理，55，252-262.（査読なし）
2)福田美紀・鈴木直人(2009)．校庭の芝生化が子どもの心身の健康に及ぼす効果　同志社心理，55，246-251.（査読なし）
3)鈴木直人(2009)．子どもを取り巻く環境変化と精神的健康　同志社心理，55，207-220.（査読無し）
4)山口麻衣・鈴木直人(2008).衝動的行動傾向とストレス・コーピングスタイルの関係性　同志社心理 54，71－77.（査読無し）
5)福井義一・鈴木直人(2008)．Symondsの養育態度尺度再考　同志社心理 54，39－48.（査読無し）
6)山本恭子・鈴木直人(2008)．対人関係の形成過程における表情表出　心理学研究，78，567－574.（査読有り）
7)山口麻衣・鈴木直人（2007）．衝動的行動における自己報告尺度と行動的測度との関係性の検討　心理学研究，78，441－445.（査読有り）
8)小川時洋・敦賀麻理子・小林孝寛・松田いづみ・廣田昭久・鈴木直人（2007）．覚醒水準が隠匿情報検査時の生理反応に与える影響　心理学研究，78，407－415.（査読有り）
9)藤村友美・鈴木直人（2007）．表情の表出過程及び形態学的変化が感情認識に及ぼす影響：次元的観点に基づいた表情の検討　認知心理学研究，5，53－61.（査読有り）
10)山口麻衣・鈴木直人(2007)．衝動的行動質問紙の作成と衝動的行動に影響するパーソナリティ特性との関係性の検討　感情心理学研究，14，129－139.（査読有り）
11)敦賀麻理子・鈴木直人(2007)．“あがり”経験の反復が心理反応および精神生理学的反応に及ぼす影響　感情心理学研究，14，115-128.　（査読有り）
12)山本恭子・鈴木直人(2007)．他者との関係性が刺激提示中および提示後期間の表情表出に及ぼす影響 社会心理学研究，23，1-9.（査読有り）
13)手塚洋介・敦賀麻理子・村瀬裕子・鈴木直人(2007)．認知的評価がネガティブ感情の体験と心臓血管反応の持続に及ぼす影響 心理学研究，78，42－50.（査読有り）
14)荒川　歩・木村昌紀・鈴木直人(2007)．身振り頻度の抑制に対する主観的規範・自動性・他者からの見えに対する意識と実際の身振り頻度との関係　　同志社心理，53，10-18.（査読なし）
15)Takehara,T.，Ochiai，F.，Watanabe,H.，& Suzuki, N. (2006). The fractal property of internal structure of facial affect recognition: A complex system approach. *Cognition and Emotion,* 21，522-534.（査読有り）
16)Yamamoto，K. & Suzuki, N. (2006). The effects of social interaction and personal relationships on facial expressions. *Journal of Nonverbal Behavior,* 30，167-179.（査読有り）
17)敦賀麻理子・鈴木直人(2006)．スピーチにおける“あがり”の主観的反応の強度が心臓血管系及び呼吸器系反応に与える影響　心理学研究，77，235-243,（査読有り）
18)藤村友美・鈴木直人(2006)．動画表情と静止画表情の認知構造　感情心理学研究，18，56-64.（査読有り）
19)荒川　歩・竹原卓真・鈴木直人(2006)．受信者が感じている感情が送信者の顔文字に与える影響　感情心理学研究，13，49-55

〔学会発表〕（計　46　件）

1)鈴木直人・齋藤敦子　照明条件が作業課題に及ぼす影響(日本環境心理学会第2回大会，口頭発表，2009年3月28日）
2)藤村友美・佐藤　弥・鈴木直人　動画及び静止画表情に対する顔面筋電図
3)藤村友美・佐藤 弥・鈴木直人　動画表情に対する表情模倣―次元的観点からの検討―(日本心理学会第72回大会，ポスター発表，2008年9月21日）
4)森岡陽介・鈴木直人　意図的な表情表出が表情判断胃及ぼす影響(日本心理

学会第72回大会，ポスター発表，2008年9月21日）
反応　―表情の覚醒度が及ぼす影響―（電子情報通信学会，口頭発表，2008年11月24日）
5)福田美紀・鈴木直人　校庭の芝生化が児童の対人関係に及ぼす効果（日本心理学会第72回大会，ポスター発表，2008年9月20日）
6)山口麻衣・鈴木直人　感情喚起時における衝動的行動と精神生理学的反応（日本心理学会第72回大会，ポスター発表，2008年9月19日）
7)山本恭子・鈴木直人　観察者の存在が二者間の感情コミュニケーションに及ぼす影響（日本心理学会第72回大会，ポスター発表，2008年9月19日）
8)藤村友美・佐藤弥・鈴木直人　動画表情に対する表情模倣―次元的観点からの検討―（日本心理学会第72回大会，ポスター発表，2008年9月21日）
9)福田美紀・鈴木直人　校庭の芝生化が児童の遊びに及ぼす効果（日本健康心理学会第21回大会，ポスター発表，2008年9月21日）
10)Fujimura, T. & Suzuki, N.　Effects of dynamic information in recognizing emotional facial expressions in peripheral and central vision(12th European Conference of facial expressions, poster presentation, July 29, 2008)
11)藤村友美・鈴木直人　表情の動的情報が感情認識に及ぼす影響　－周辺視野と中心視野の違い－（日本認知心理学会第6回大会，ポスター，2008年7月6日）
12)山口麻衣・鈴木直人　感情心理学の側面からの衝動性行動の実験的研究　慶應義塾大学グローバルCOE論理と感性の先端的教育研究拠点 第13回シンポジウム「衝動性の科学 ―感情・行動・合理性―」（2007年12月22日　慶応大学）
13)山口大輔・美濃哲郎・鈴木直人　“あがり”と唾液中アミラーゼ活性との関連―特性不安との関係性から―　関西心理学会第119回大会（2007年11月18日　関西大学）
14)佐伯思真・鈴木直人　仏像が与える印象の検討　関西心理学会第119回大会（2007年11月18日　関西大学）
15)鈴木直人　校庭芝生化による子供への影響　日本芝草学会秋季大会基調講演（2007年11月9日　神戸）
16)Morioka, Y. & Suzuki, N.　Neural substrates of perception facilitation for emotional face in the attentional blink: An fMRI study.　Society for Neuroscience Conference　(2007年11月6日San Diego, USA)
17)山口麻衣・鈴木直人　衝動的行動傾向とイライラ感が精神生理学的反応に及ぼす影響　トヨタ自動車東富士研究所 委託研究報告会　(2007年9月29日　トヨタ自動車東富士研究所)
18)山口麻衣・鈴木直人　衝動的行動傾向の差異が精神的反応に与える影響 ―二重課題およびプローブ刺激を用いて―　日本心理学会第71回大会　(2007年9月20日　東洋大学)
19)福田美紀・鈴木直人　児童生徒における対人ストレス過程の検証　日本心理学会第71回大会　(2007年9月19日　東洋大学)
20)西萩 恵・近藤正樹・鈴木直人・中川正法 2年間にわたる軽症認知障害患者への早期介入の試み 日本早期認知症学会第 9 回大会 (2007年9月15日 芦原温泉)
21)福田美紀・鈴木直人　校庭の芝生化が児童の心身の健康に及ぼす効果について３　日本健康心理学会20回大会(2007年9月1日文教大学)
22)手塚洋介・村山奈穂・鈴木直人　社会的要因がネガティブ感情体験と心臓血管系反応の持続に及ぼす影響　日本生理心理学会第25回大会(2007年7月15日　北海道大学)
23)Fujimura, T. & Suzuki, N.　The effects of dynamic information on the recognition of facial expressions in dimensional and categorical judgments. 15th Conference of International Society for Research on Emotions, (2007年7月14日　Australia)
24)Yamaguchi, M. & Suzuki, N.　Examination of the influence of impulsive behavior tendencies on psychological, behavioral, and physiological responses using the dual task and probe stimulus. 15th Conference of International Society for Research on Emotions, (2007年7月13日 Australia)
25)Tsuruga, M. & Suzuki, N. Psychological and psychophysiological habituation in related "AGARI" (stage fright) experience.　15th Conference of International Society for Research on Emotions, (2007年7月13日　Australia)
26)Ikemoto, M. & Suzuki, N.　The effect of vocal quality on vocal emotions. 15th Conference of International Society for Research on Emotions, (2007年7月13日　Australia)
27)Yamamoto, K. & Suzuki, N.　Facial expressions in the course of relationship formation. 15th Conference of International Society for Research on Emotions, (2007年7月12日　Australia)
28)藤村友美・鈴木直人　動的情報が表情認知に及ぼす影響―中心視野と周辺視野の違い―　日本認知心理学会第 5 回大会 (2007年5月26日　京都大学)
29)池本真知子・鈴木直人　感情を表出した音声の主観的評価と音響学的特長との関係性についての検討　日本感情心理学会第15回大会(2007年5月20日　大阪学院大学)
30)山口麻衣・鈴木直人　衝動的行動傾向と

反応方略との関係性の検討　日本感情心理学会第15回大会(2007年5月19日　大阪学院大学)
31)藤村友美・佐藤弥・鈴木直人　fEMG指標による動画表情と静止画表情に対する表情模倣の検討　日本感情心理学会第 15 回大会 (2007年5月19日　大阪学院大学)
32)村山奈穂・手塚洋介・鈴木直人　ポジティブ感情が対処行動に及ぼす影響の検討　関西心理学会代118回大会　(2006年11月19日　帝塚山大学)
33)山口麻衣・鈴木直人　衝動的放棄・パニック行動傾向とコミッション・エラーの関係―continuous performance testを用いた実験的検討　日本心理学会第 70 回大会(2006年11月5日　九州大学)
34)竹原卓真・落合史生・鈴木直人　表情認知構造のフラクタル次元　―通常の表情とノイズを載せた表情の差―　日本心理学会第70回大会(2006年11月５日　九州大学)
35)佐伯思真・鈴木直人・椎名乾平　仏像が与える印象の検討　日本心理学会第 70 回大会(2006年11月４日　九州大学)
36)小川時洋・敦賀麻理子・小林孝寛・松田いづみ・廣田昭久・鈴木直人　虚偽検出検査における観察の影響　日本心理学会第70回大会(2006年11月４日　九州大学)
37)中山麻紀・鈴木直人　職体験がfeelingの喚起に及ぼす影響の検討　日本心理学会第70回大会(2006年11月４日　九州大学)
38)福田美紀・加藤　司・鈴木直人　小学生用対人ストレスコーピング尺度作成の試み　日本心理学会第 70 回大会(2006 年 11 月 3 日　九州大学)
39)藤村友美・鈴木直人　動画と静止画による表情認識過程の検討　日本心理学会第70回大会(2006年11月3日　九州大学)
40)山本恭子・鈴木直人　対人関係の形成に伴う表情表出の変化についての実験的検討　日本社会心理学会代47回大会　(2006年9月17日)
41)福田美紀・鈴木直人　校庭の芝生化が児童の心身の健康に及ぼす効果(2)　日本健康心理学会　(2006年9月9日　同志社大学)
42)手塚洋介・福田美紀・村山奈穂・中山麻紀・鈴木直人　認知的評価の自発的変化と感情反応の持続との関連性　日本感情心理学会第１４回大会(2006年5月14日　広島修道大学)
43)杉山　匡・児玉昌久・鈴木直人　表情と感情語の分類による感情次元の探索的検討　日本感情心理学会第 １４回大会(2006年5月14日　広島修道大学)
44)森岡陽介・鈴木直人　静止画表情と動画表情、及び既知人物表情と未知人物表情を用いた感情評定の比較　日本感情心理学会第１４回大会(2006年5月14日　広島修道大学)
45)藤村友美・鈴木直人　表情認識過程における動的情報野影響の検討　日本感情心理学会第１４回大会(2006年5月14日　広島修道大学)
46)池本真知子・鈴木直人　感情を表出した音声の音響学的特徴に関する検討II　日本感情心理学会第１４回大会(2006 年 5 月 13 日　広島修道大学)

〔図書〕(計　３　件)
1)鈴木直人〔編〕・海保博之〔監修〕(2007). 朝倉心理学講座10 感情心理学　朝倉書店

2)山内弘継・橋本　宰(監修) 岡市広茂・鈴木直人(編集) (2006).　心理学概論　ナカニシヤ出版
3)鈴木直人(2006). ポジティブ心理学　島井哲志(編) 第5章　ポジティブな感情と認知とその心理的・生理的影響　ナカニシヤ出版

〔産業財産権〕
○出願状況（計　1　件）

○取得状況（計　件）

無し

〔その他〕

無し

６．研究組織
(1)研究代表者

鈴木　直人
同志社大学　文学部　教授
30094428

(2)研究分担者

無し

(3)連携研究者

無し